

まちを元気にする日田の川づくり

九州地方整備局 筑後川河川事務所 日田出張所 上水樽 昌幸

1. はじめに

『水郷日田』、その名にふさわしい瀬音豊かで市民の憩いの川を願って誕生した「台霧の瀬づくりプロジェクト」。地域と連携・協働し、せせらぎをつくり、維持管理の仕組みをつくった。この取り組みは、先駆的な事例として、幾度となく新聞、テレビ等で報道された。整備後は、日常は散策コースとして、または、総合学習のフィールド、リバースクール、日田の風物詩の一つである川開き観光祭といった様々なイベント会場になるなど、幅広く利活用され、賑わいを見せている。本プロジェクトを通じ、『地域の川は、地域で守り育てていく』という機運が高まったことに喜びを感じるとともに、川づくりがまちづくりや地域おこしへつながることの可能性、そこには「住民参加」が不可欠であるということを実感した。



台霧の瀬・リバースクールの様子

この教訓を踏まえ、筑後川支川花月川豆田地区の河川改修や派川隈川の景観形成事業の実施にあたっては、「住民参加」をテーマに、地域住民と議論を重ねた上で、川づくりプランを作成し、工事施工を行った。

本報告は、住民参加の川づくりに関する一連の取り組み、完成後の利活用状況の紹介であり、改めて住民参加の川づくりが地域づくりに寄与することを啓発するものである。

2. 花月川豆田地区における取り組み

2. 1 観光地としての花月川の課題

大分県日田市は、江戸時代には幕府直轄の天領として栄え、今も当時の町並みや、掛屋と呼ばれる豪商たちの活躍の跡が町のいたるところに残されており、平成16年12月には豆田町が重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に指定された。天領時代の粋で雅びな雰囲気味わいたいという小京都・豆田町への観光客は、年間約50万人も訪れ賑わいをみせている。



豆田町の歴史的な町並みと花月川

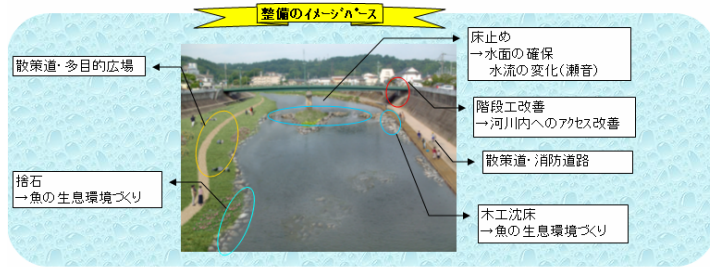
その豆田町の町並みに隣接して流れる花月川は急勾配の護岸が続き、ゴミはあれども、人々の影は見られず、小京都・豆田町に相応しいとは言い難い状況であった。

2. 2 川づくりプランの作成

豆田地区の河川改修箇所の周辺が伝統的な町並みを有し観光資源となっていること、地域住民が花月川を観光資源にしたいと考えていること等を踏まえ、河川改修を行うに当たり日田市の協力を得て「花月川～豆田地区周辺～川づくり意見懇談会」を設置した。懇談会は地元自治会長を始め、観光協会や地元商店街、住民団体、NPO法人、漁協関係者など17名の地域住民と日田市、国土交通省で組織し、平成16年8

月に2回、同10月に1回、計3回開催された。

懇談会では「歴史的な美しい豆田町のまちなみと調和した川づくり」「みんなが安心して近づける憩いの場となる川づくり」を基本コンセプトに、治水・景観・動植物の生息・生育環境等を考慮して施設の配置計画を行った。



また、維持管理については、地域の役割も認識して頂き、清掃活動を地元が中心となって進めていくことが確認された。

2. 3 施工中の取り組み

平成16年11月工事が発注され、実施工期間約3ヶ月という厳しい条件の下、地元の期待と不安の中、地元住民に見守られながら、平成17年3月末に完成した。工事期間中、豆田町の観光ガイドの方から、観光客に工事内容もご案内できるようにしたいと相談があり、現地で説明会を行い、工事内容の理解を深めて頂いた。完成後、工事を担当した現場代理人が「これまで工事をしてきた中で、苦情のなかった現場は初めて」と語っていることにも住民の理解と協力、「住民参加」の効果が見られる。



3. 隈川中ノ島・日ノ隈地区における取り組み

3. 1 観光地としての隈川の課題

大分県日田市の隈地区は、江戸幕府の頃から商人の町として栄え、現在では筑後川沿いに温泉旅館が立ち並ぶ観光拠点となっており、毎年約50万人の観光客が訪れ賑わいをみせている。

一方、この歴史的界隈の狭隘な道路に多くの観光客と観光車両が溢れ、通過交通の入り込みもあり、ゆっくりと散策できない課題を抱えている。このため、日田市が旅館組合とタイアップして観光バスを対岸の隈川高水敷に駐車させ、観光客を屋形船で送迎するという、旅館街の交通混雑の緩和と新たな観光資源の開発を目的とした社会実験を行った。



社会実験は観光客から好評を得た。しかし、駐車場として利用された隈川には護床

ブロックや河岸に乱積みされた大量の根固ブロックが水面から露出、さしずめ「根固ブロックの墓場」の様相を呈し、観光客が最初に目の当たりした光景が「水郷日田」のイメージとは程遠い景観であることに鑑み景観形成事業に着手することとなった。

3. 2 懇談会

計画段階から地域住民の意見を聞くため、住民団体「日田の川を考える会」の定例会議に地元自治会長も参加して頂き懇談会を開催した。

懇談会は、平成16年10月と同12月の2回開催され、自由な討論の中で、地域住民から多くの知恵と感性を頂くことができた。

～知恵と感性による提言～

・ベンチ ・カップルのいる風景 ・すべり台 ・水のカーテン 等



懇談会の開催

3. 3 施工中の取り組み

平成16年12月、細部の設計を同時に検討しながらの実施工期間約3ヶ月という厳しい条件だったが、現場代理人が、住民懇談会での地域住民の熱意を感じ、そして、自ら子供の頃、隈川で遊んだ記憶から、隈川の川づくりができる喜びとアイデアを持って施工に取り組み、平成17年3月末に完成した。



さらに現場代理人は工事期間中、川に対して市民にもっと関心を持ってもらおうと工事現場のイメージアップとしてハートのイルミネーションをバレンタインデー前からホワイトデー迄の期間夜間点灯させ、若者の愛の語らいの場を作り、テレビ・新聞にも取り上げられた。また、工事完成時には自主的に自らの想いを込めた工事履行報告を映像化した。現在、この映像は様々な住民団体との交流の場で放映し、近隣小学校の授業でも活用されている。

4. 地域住民の歓迎

4. 1 花月川豆田地区

平成17年4月初旬。河川改修の完成を待ち侘びたかのように、河川内を散策する人々が日増しに増えていった。また、癒しの空間として介護での利用や、近隣の保育園児の安全で安心できるお散歩コースともなっている。一方で犬を連れて散歩する人も増え、「せっかく綺麗にしたのに犬の糞があるが、どうかならないか？」という苦情が寄せられた。これはまさしく川を利用し、川に目を向けてくれたからこそ出る嬉しい苦情でもあった。



癒し空間としての利用状況

4月23日には、豆田町の「上町通り商店会」「みゆき通り商店街」が主催する「花月川河川改修完成記念イベント」が開催された。記念イベントは、「花月川今昔写真展」に始まり、商店街ごとの催しや「花月川河川改修完成記念商品券」の発行がなされた。

メインイベントは2部構成になっており、高水敷にはステージが設置され、第1部は午前中に安全祈願祭、園児や小学生によるアユの放流が行われた。第2部は花月川の水面に約2000本の竹灯籠のかがり火が揺らぎ、龍神太鼓や日田祇園囃子が木霊し、昇り獅子の躍動感ある舞が披露されるなど、今まで見たことのない幻想的な花月川の姿に酔いしれることとなった。



花月川河川改修完成記念イベント

4. 2 隈川中ノ島・日ノ隈地区

水の流れがもつ美しさを最大限に引き出した『水のカーテン』等、地域の方々の川への想いがこめられた新たな隈川は、「根固めの墓場」から清涼感あふれる川に生まれ変わった。安心して近づけるようになった水辺には、太公望の姿が毎日のように見られるようになり、石投げを競い合ったり、川を横断する『川ガキ』の姿、春の陽気が心地良い日や休日には昼食をとるOLやカップルの姿も見られるようになった。



総合学習のフィールド

5月21日に開催された日田の風物詩「川開き観光祭」では、高水敷が見物客で覆いつくされた。



日田の風物詩・川開き観光祭

また、隣接する日隈小学校が、総合学習のフィールドとして活用するなど、利用の輪が拡がりつつある。

5. まとめ

「台霧の瀬づくりプロジェクト」に始まり、「住民参加」をテーマに取り組んだ花月川及び隈川の川づくりを通じ、地域と連携して川づくりを行うことは、地域のニーズをよりきめ細やかに反映した河川整備を行うことができ、川づくりがまちづくりや地域おこしに発展することを実感した。



この成果を顧みて、これからの河川行政に必要なのは、普段から地域とコミュニケーションを図るとともに、定期的な市民団体との懇談会やリバースクール等

を通じ、互いに情報や川への想いを共有することであり、それこそが地域との信頼関係を築き、河川行政への理解を深めることになると痛切に感じている。

住民参加による川づくりは、市民がもっと気軽に、もっと楽しく川を利用・活用することを促し、川を持つ魅力や、川は癒しの空間であることを改めて気づくことに繋がり、そこから川と人との繋がり、人と人との繋がりが芽生え、人が優しさを取り戻すことで、川も元気に、人もまちも元気になるのではないだろうか。

今秋、20000本の竹灯籠の篝火がそれを証明してくれる。